王安石の杜甫に対する尊敬

前代の詩人杜甫に対する絶対的な尊敬。（杜甫の地位は、彼以前はなお不安定であった）

「吾れは少陵の詩を観(み)るに謂(おも)えらく元気と侔(ひと)し」

（元気…宇宙のエネルギーと同一である）

「願わくは公を死よりおこして、之に従いて遊ばん」と述べ、現在、杜甫を古今に卓絶する詩人とする認識は、王安石によってはじめて提示されたのである。

彼が杜甫を尊んだのは、もっとも人民を愛する詩人としてであったことは、いうまでもない。しかし杜甫の同時に持つ抒情性、それを尊んだのであると私は思う。

王安石の律詩には顕著に杜甫を学ぶものがある。不遇時代の作である、**五言律詩「旅思」**を紹介する。

「地は大にして」の一聯を、「子美の句法を得たり」と、北宋末の唐庚(とうこう)は指摘するが、次の聯も、杜甫の「片雲天共遠、永夜月同孤」を意識する

1 此身南北老　　此の身　南北に老いて
2 愁見問征途　　愁見(うれ)いつつ征途(せいと)を問う
3 地大蟠三楚　　地は大にして三楚に蟠(わだか)まり
4 天低入五湖　　天は低くして五湖に入る
5 看雲心共遠　　雲を看れば心は共に遠く
6 歩月影同孤　　月に歩(あゆ)めば影は同じく孤なり
7 慷慨秋風起　　秋風の起るに慷慨(こうがい)し
8 悲歌不爲鱸　　悲歌するは鱸(すずき)の為ならず

政治の大家であった彼が、一方には極度に抒情的な、したがって極度に非政治的な、詩をも好んだというのは、矛盾のように見える。

しかし両者ともに彼の性格の中心をなす一つのもの、潔癖、から出るであろう。詩はあくまでも抒情を本質とする。それが彼の詩に対する考えであったのではないか。事実、彼の詩における抒情の比率は、同時の諸家の上にある。

（宋詩概説　抄出　吉川幸次郎）